



2014年10月22日放送

印象に残る症例②

玉嶋血液内科・漢方診療所 大谷 知穂

20年以上続く片頭痛に対して、真武湯が著効した症例を経験しましたので、ご紹介させていただきます。

症例は40歳代男性です。既往歴に交通事故で左膝の手術歴があります。生活歴は、アルコールは機会飲酒、喫煙はありません。脂質異常症に対してアトルバスタチンの内服をしています。

[現病歴]

成人してから月に2~3回、頭痛が起こるようになりました。後頭部が重くなる前兆があり、その後、後頭部に拍動する頭痛が起こります。ロキソプロフェンなどの鎮痛剤を内服して、しばらく横になっていると改善することもあります。鎮痛剤の内服が遅くなると効果がなく、吐き気も出現します。総合病院神経内科で片頭痛と診断されました。X年10月25日頭痛の改善のため漢方治療を希望し、受診となりました。

[現症]

身長170cm、体重58kg、血圧に異常はありません。胸腹部特記すべき所見を認めません。

[東洋医学的診察]

問診：子供のころから寒がり、胃腸虚弱があり普段から1日1~2回の軟便があります。肉や、油ものをとると胃もたれ、下痢が出現するためあまりとらないようにしています。

食後、特に昼食後はすぐに眠くなります。また子供の頃から乗り物酔いもしやすいです。尿の回数が多く、成人してから夜間尿が1日に1~2回認められます。

漢方学的診察：脈診は沈でした。舌診は淡紅、胖大で、歯圧痕を認めます。黄白色の苔が全体に覆っています。腹診は、腹力はやや強く、腹直筋の緊張を軽度認めましたがその他の所見は認めませんでした。

[経過]

おそらく幼少時より腎陽虚、脾陽虚があり、それに伴う水滞があると考え、真武湯エキスを5.0g分2を選択し、開始しました。

真武湯は、お茶のようにおいしく飲んで、温まってよいとのことでした。内服開始2週間後の受診まで頭痛がありませんでした。その後、時折頭痛がありましたが、約1か月半で鎮痛剤は一度内服したのみで、頭痛の程度は軽くなり、吐き気も起こりませんでした。内服開始後、3か月後の1月下旬には、真武湯を飲んでいるととても調子がよく、頭痛は起こらなくなったとのことでした。その後も真武湯を継続し、頭痛は起こらなくなりました。夏になっても、内服によって体が熱すぎることはなく、真武湯を継続しており、その後も頭痛は起こっていません。

[考察]

本症例は、腎陽虚と脾虚から水湿が停滞しやすく、腎陽虚によって脾胃が温煦されず、寒飲が上逆して頭痛が起こり、また、脾気が下降して軟便となる病態と考えました。真武湯によって、腎陽虚を伴う水湿の停滞を改善させることによって、頭痛が改善したと考えました。

片頭痛に対して、真武湯が有効であるという報告は多くありません。五苓散、桂枝人参湯、呉茱萸湯などはしばしば報告されています。

真武湯は腎陽虚への方剤でもあります。片頭痛の病態に腎陽虚も含めて考える必要があると考え、真武湯も選択肢の一つとして症例を積み重ねていくことが重要だと思います。実際、当院では他にも真武湯が有効であった症例を経験しています。

また、幼少時の症状、体質を考えることは、漢方治療において重要であると考えます。今回の症例のように幼少時からの胃腸虚弱があるという場合は、胃腸虚弱の原因がどこにあるのか、それをどのように治療するのかという視点を持つことが治療効果を高めることにつながると考えます。問診の段階で、幼少時の状況、特に胃腸虚弱、カゼをひきやすい、熱が出やすい、など、聞かなければ、本人の口から聞けないことは、私の診療所では、問診表の項目になっています。患者さんに詳しく尋ねることは重要であると思います。

内服について、本症例では朝夕それぞれ1包としています。特に働いている患者さんでは、朝昼夕と飲むのは大変なことで、飲めないことも多いと思います。1日3回のまなければいけないストレスもあるかと思います。私の診療所では朝夕それぞれ1包とすることが多いです。方剤が患者さんにあっていれば、必ずしも朝昼夕としなければいけないことはないと思います。もちろん、朝昼夕としなければ効果がない患者さんもいますので、それ

ぞれの症例で決めることですが、朝夕とすることで、患者さんのコンプライアンスを良好にするのは間違いないと思います。

真武湯の原典は傷寒論で、太陽病中篇と少陰病篇に真武湯の条文があります。

「太陽病，汗を發し，汗出でて解せず，其の人なお發熱し，心下悸，頭眩，身潤動，振振として地に擗れんと欲する者は，真武湯之をつかさどる」

少陰病篇の条文は「少陰病，二三日已えず，四五日に至って腹痛，小便不利，四肢沈重疼痛し，自下利する者は，此れ水氣有りと為す，其の人或いは欬し，或いは小便利し，或いは利せず，或いは嘔する者は，真武湯之を主る」とされています。

真武湯は少陰病の代表方剤です。真武湯を使う目標とする症候には、元気がない、横になりたがる、四肢が重だるい、めまいやふらつきがある、寒がり、下痢しやすい、腹痛がある、などがあります。裏寒、水湿の停滞があり、腎にまで寒が及んでいる状態、新陳代謝も著しく衰えているような状態のものに使われます。

真武湯の構成生薬は、茯苓、芍薬、朮、生姜、附子から成り立っています。茯苓は体内の水湿や痰飲を取り除く利水、利湿の働きがあり、また、脾の機能を高める健脾の働きもあります。芍薬は補血滋陰の働きがあります。朮は脾胃の湿をのぞいて、健脾作用もあります。生姜は脾胃を温めて除湿する働きもあります。附子は全身の陽気を補い高める働きがあり、特に腎陽を補い、寒湿除去の働きがあります。

このように、真武湯は、腎陽虚、脾虚、水滞に対する方剤と考えられます。

[まとめ]

20年以上続く頭痛に対して真武湯が著効した症例を経験しました。本症例では腎陽虚、脾虚をとまなう水湿の停滞に対して真武湯の効果があったと考えました。頭痛には様々な原因がありますが、本症例のように、腎陽虚、脾虚があることが片頭痛を起こす誘因になりうる場合があると考えました。幼少時からの体質も考慮することも、とくに長期間に及ぶ症状に対する漢方治療においては有用と考えます。